

Osaka Creative Forum

新しいパブリックの形はここにある

プラットフォーム形成支援事業の試みと可能性

まとめ





Osaka Creative Forum

新しいパブリックの形はここにある
プラットフォーム形成支援事業の試みと可能性

2013.11.15. FRI
18:30 ~ 21:00

大阪府中央公会堂 3階 小集会室
定員 150名 参加費無料

※事前申し込みが必要です

社会の問題や行政が抱える課題をクリエイティブに解決し、都市の魅力へとつなげる。大阪の未来を創造する会議。

基調講演

ニューヨーク、ブライアント・パークにみる都市再生の成功事例

ノーマン・ミンツ氏
(Mr. Norman Mintz)

プロジェクト・フォー・パブリックスペース (PPS)
取締役 (メインストリート・ダウンタウン部門)



市街地再生のあらゆる課題に対して技術的サポートを実践してきたミンツ氏は、ニューヨーク州コーニング市のマーケットストリート修復プログラムにおいて歴史保全と市街地再生を果たした事例において高く評価され、アメリカ初の“メインストリートマネージャー”として認められるなど、市街地再生の先駆者として、様々な規模の地域や組織の再生に取り組んできた。

また20年に渡って34th Street PartnershipとBryant Park Corporationというニューヨークの2つのBID組織と共に活動してきた。コロンビア大学、コーネル大学、レンセラー工科大学で教鞭を執り、現在はプラットフォームインスティテュートにて、近隣商業地域再生のコースを指導。

1982-1989年にはPPSのメンバーとして、数多くのコミュニティの再生戦略に関わり、近年はPPSの様々なプロジェクトとコラボレーションするなど、多方面にて活躍中。

都市・地域再生の先進事例紹介

岩見沢複合駅舎

佐賀「わいわい!! コンテナ」プロジェクト

西村 浩氏
建築家



墨田区食育推進計画策定

立川子ども未来センター指定管理業務

山崎 亮氏
コミュニティー・デザイナー



プラットフォーム形成支援事業

水都大阪における試み

忽那 裕樹氏
ランドスケープ・デザイナー



Osaka Creative Forum

～アメリカの市街地再生を先導する第一人者、ノーマン・ミンツ氏を迎えて～

江之子島文化芸術創造センターが担う「プラットフォーム形成支援事業（P F 事業）」は、公共空間の利活用、地域の活性化、まちづくりなど、行政の単独の部局だけでは解決困難な複合的な行政課題に対して、アーティストやデザイナー、府民、専門家、企業、大学など多様な立場の組織や人が対等に議論できるプラットフォームを形成し、アートやデザインをツールとして、これらの課題の解決を目指して行こうというものです。

P F 事業は、多様なクリエイターに行政課題へ参画する活動機会を提供すると共に、都市整備のみならず、医療や福祉、防災等の分野で新たな行政手法を獲得する政策イノベーションをもたらします。同様の試みは他の地域でも実践されていますが、持続可能な手法として府政に位置付けようとする点で、本 P F 事業はユニークといえます。

今回、ブライアント・パークなどニューヨークの2つのB I D（ビジネス改善地区）に対し、20年にわたって緊密に関わってこられたノーマン・ミンツ氏をお招きし、その現状や制度の意義・課題について語っていただくとともに、コミュニティが支える公共空間の仕組みを創造・維持管理するニューヨークのNPO、プロジェクト・フォー・パブリックスペースにおけるミンツ氏の活動についても紹介いただきます。また、全国各地で先進的活動を実践されている西村氏、山崎氏、忽那氏も交え、P F 事業の可能性を議論します。

開催内容

主催者あいさつ 18:30～18:35

基調講演 18:35～19:20

ニューヨーク、ブライアント・パークにみる都市再生の成功事例

ノーマン・ミンツ

都市・地域再生の先進事例紹介 19:20～20:10

西村 浩

—ひとつのレンガがまちをつくる—
岩見沢複合駅舎
—空き地が増えるとまちが賑わう!?—
佐賀「わいわい!! コンテナ」プロジェクト

山崎 亮

—多様な主体がつながる計画づくりと実践—
墨田区食育推進計画策定
—マンガを活用した公共施設のマネジメント—
立川市子ども未来センター指定管理業務

忽那 裕樹

—行政課題を解決するイノベーション—
プラットフォーム形成支援事業
—都市の水辺の魅力づくり—
水都大阪における試み

パネルディスカッション 20:10～21:00

クリエイティブに都市の課題を解決する方法

パネリスト

西村 浩（にしむら ひろし）

建築家 / ワークヴィジョンズ 代表

1967年佐賀県生まれ / 東京大学工学部土木工学科卒業、東京大学大学院工学系研究科修士課程修了後、設計事務所勤務を経て1999年ワークヴィジョンズ設立。建築・土木・まちづくり等、常に「まち」を視野にいれ、分野を超えてモノづくりに取り組む。

主な計画・作品に、大分都心南北軸構想、佐賀市街なか再生計画、函館市中心市街地トータルデザイン、岩見沢複合駅舎、鳥羽海辺のプロムナード、長崎水辺の森公園橋梁群など。主な受賞歴に、日本建築学会賞、土木学会デザイン賞、グッドデザイン賞大賞、BCS賞、ブルネル賞、アルカシア建築賞 他多数。

山崎 亮（やまざき りょう）

コミュニティ・デザイナー / studio-L 代表

京都造形芸術大学教授、慶応義塾大学特別招聘教授。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。まちづくりのワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、建築やランドスケープのデザイン、市民参加型のパークマネジメントなどに関するプロジェクトが多い。「海士町総合振興計画」「マルヤガーデンス」「studio-L 伊賀事務所」でグッドデザイン賞、「親子健康手帳」でキッズデザイン賞、『コミュニティデザイン（学芸出版社）』にて不動産協会賞などを受賞。

忽那 裕樹（くつな ひろき）

ランドスケープ・デザイナー / 株式会社 E-DESIGN 代表

1966年大阪府生まれ。大阪府立大学農学部緑地環境工学科卒業。景観・環境デザインをはじめ、まちづくりの活動や仕組みづくりまで、幅広いプロジェクトに携わる。庭園をはじめ公園や広場、大学キャンパス、商業・集合住宅・病院などのランドスケープのデザインとプログラムを国内外で展開。また、パークマネジメント、タウンマネジメントを通して、地域の改善や魅力向上に様々な立場で関わり、現在、官民協働の場として設立した水都大阪パートナーズ及び江之子島文化芸術創造センターのプロデューサーを務めている。

GOODDESIGN 賞（千里リハビリテーション病院、ヌーヴェル赤羽台、プリリア六甲レジデンス）、造園学会奨励賞（近畿大学本部キャンパス「洗心の庭」）、他多数。NPOパブリックスタイル研究所理事長。

申込方法

- こちらの申込書をFAXもしくは、メール（※）で右記までお送り下さい。
※メールの方はタイトルを「Osaka Creative Forum」申し込み」として、下記の必要事項を記入のうえ、右記アドレスまでお送り下さい。
- 申込の確認後、事務局からメールもしくはFAXでご連絡させていただきます。
- 先着順で受け付けます。（定員 150 名）

代表者名	
参加人数	
メール アドレス	
TEL	
FAX	

会場アクセス

- 会場
大阪市中央公会堂 大阪市北区中之島1丁目1番27号
- 電車をご利用の場合
 - ・地下鉄御堂筋線 / 京阪電鉄「淀屋橋」駅下車
<1> 番出口から徒歩約5分
 - ・地下鉄堺筋線 / 京阪電鉄「北浜」駅下車
<22> 号出口から徒歩約6分
 - ・京阪電鉄中之島線「なにわ橋」駅下車 <1> 番出口から徒歩約1分

【主催】

大阪府、大阪府立江之子島文化芸術創造センター（enoco）

【事務局・問い合わせ・申し込み先】

江之子島文化芸術創造センタープラットフォーム部門
株式会社 E-DESIGN 内

TEL : 06-4964-5151 FAX : 06-4964-5152

Mail : ishizuka@edesign-inc.com（担当：石塚）

基調講演

Norman Mintz

SENIOR ASSOCIATE, MAIN STREETS AND DOWNTOWNS



One of the Main Street movement's earliest pioneers, Norman Mintz has consulted on all matters of downtown revitalization providing technical assistance in areas of urban design, retail retention, organization and promotion. He works with communities and organizations of every size to strengthen their capacity to successfully execute and manage the many revitalization challenges they face.

Norman's career in historic preservation and downtown revitalization began with his direction of the nationally acclaimed Market Street Restoration Program in Corning, NY (1974-81), where he initiated the role and became recognized as America's first Main Street manager. He is the co-author of the widely acclaimed book, *Cities Back From the Edge: New Life for Downtown*, which chronicles stories from around the country that illustrate how dozens of Main Street business districts and urban commercial neighborhoods have revitalized their commercial centers using small scale, innovative approaches that encourage new local businesses.

He has worked closely for twenty years with the 34th Street Partnership and Bryant Park Corporation, two large Business Improvement Districts in midtown Manhattan. He lectures widely on the subject of downtown revitalization and has extensive teaching experience, having taught at Columbia University, Cornell University and Rensselaer Polytechnic Institute. He currently instructs a course in Neighborhood Commercial Revitalization at Pratt Institute.

Norman formerly worked at PPS from 1982-1989, when he assisted many communities in implementing various revitalization initiatives. He has recently begun a new collaboration with PPS on our in-house training workshops, and will be helping us integrate placemaking with the National Trust for Historic Preservation Main Street program as part of our new partnership. He will also be contributing his practical experience and expertise to various PPS projects.

ノーマン・ミンツ

プロジェクト フォー パブリックスペース (PPS)、メインストリート・
ダウンタウン部門、取締役

ミンツ氏は市街地再生に関するあらゆるコンサルティングを行い、さまざまな規模の地域や組織が、再生していくためのサポートを実践している。ミンツ氏の歴史保全と市街地再生に関するキャリアは、ニューヨーク州コーニング市のマーケットストリート修復プログラムから始まった。このプロジェクトは、「都心の商業地域が、地元企業を支援する小規模かつ革新的な取り組みによって再生された事例」として高く評価されている。また、20年に渡って 34th Street Partnership と Bryant Park Corporation の2つのニューヨーク、マンハッタンにおけるB I D組織と仕事を共にしてきた。さらに、市街地再生をテーマ、コロンビア大学、コーネル大学、レンセラー工科大学で教鞭を執っていた。現在はプラットインスティテュートにて、近隣商業地域再生のコースを指導している。

1982 - 1989 年の間、PPSに勤務し、多くのコミュニティの再生戦略に関わってきたが、最近では内部研修、プレイスメイキングなど、PPSと新たなコラボレーションを始めている。





基調講演

ノーマン・ミンツ

プロジェクト・フォー・パブリックスペース(PPS)、
メインストリート・ダウンタウン部門、取締役



■ “place making” 場所づくり

一番最初にお伝えしたいのは、“place making” 場所づくり。 “place making” 場所づくりという言葉は、アメリカだけでなく世界中で非常に使われるようになってきた、言葉であり手法。

ミンツ氏が所属している PPS は、“プロジェクト・フォー・パブリック、プロジェクト・フォー・プレイスメイキング”、場所づくりのためのプロジェクトという団体ですが、ここでは、世界中でこうしたプロジェクトを運営している団体です。場所づくりというのは、人々の新しい生活やライフスタイルを創造すること、それから人々をよりエキサイトする、より喜ばせる、そしてより良い場所をつくることを目指しています。

“place making” 場所づくりというのは、頭の中にあるアイデアやビジョンというものと、それから実践的な手法というものを組み合わせて、そうしたもので新しく、例えば街や街区や都市などに適応して、より良いものにしていくゾーンということです。こうしたものの中に、今世紀の中で最も重要なこうしたアイデアを形にすることの本質です。何が場所を素晴らしいのでしょうか。図.1にあるように、空間快適性や、どうやって人がつくったものを使うか、どのようなアクティビティを行えるかなどを考えます。そして、社会性として、どのような社会に繋がっているか、どのような人にアクセスができて繋がることのできる空間となっているかを考えることが “場所づくり” です。これが、PPS が取り組んでいる本質的な取り組みのひとつです。



What Makes A Great Place?



key attributes

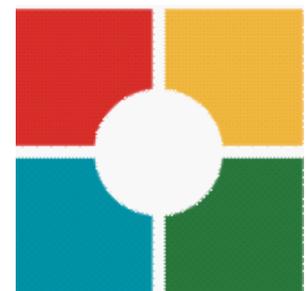


図.1 “place making” 場所づくり

■ PPS (Project for Public Space) とは

PPS は、計画やデザインのコンサルティング、それから人を教育して、訓練を行う。そして、パブリックスペースに対して、研究を行いそれを発表して社会に還元していく。そういうことを行っています。

36年間のまちづくりの経験があり、50のアメリカの州、それから、カナダの7つの地域、それから、42の国、110の都市、それから2500のコミュニティなど、世界中の多くの人々を巻き込んで、今まで活動してきました。



■デトロイトでの取り組み

デトロイトというのは、最近ニュースでも騒がれていますが、アメリカの中でも産業が衰退していて、特に都心部が荒廃していると言われている地域です。

PPSは、このデトロイトの開発業者から招聘を受け、このデトロイトの人がなくなったダウンタウンの中心部に、賑わいを取り戻して空間を再生することをミッションとして取り組んできました。

これはデトロイトだけではないですが、PPSがプロジェクトを始めるときにまず最初にやることは、コミュニティをこのプロセスに入れていき、そして、人々の意見をプロジェクトの中に反映させていくということです。こうした手法を以て、彼らの意見とか考えというものを、プロジェクトに反映させていくことができます。様々な住人とのワークショップの中から、ひとつのモデル地域を選び、この中で、パワーオープンという手法で、10のポイントを見つけることができました。

この“10”というのは、10の場所です。その選ばれた場所の中で、10の細かいエリアを選んで、その中で何かを変えていく。そういうポテンシャルの敷地を地図の中にプロットしていきます。

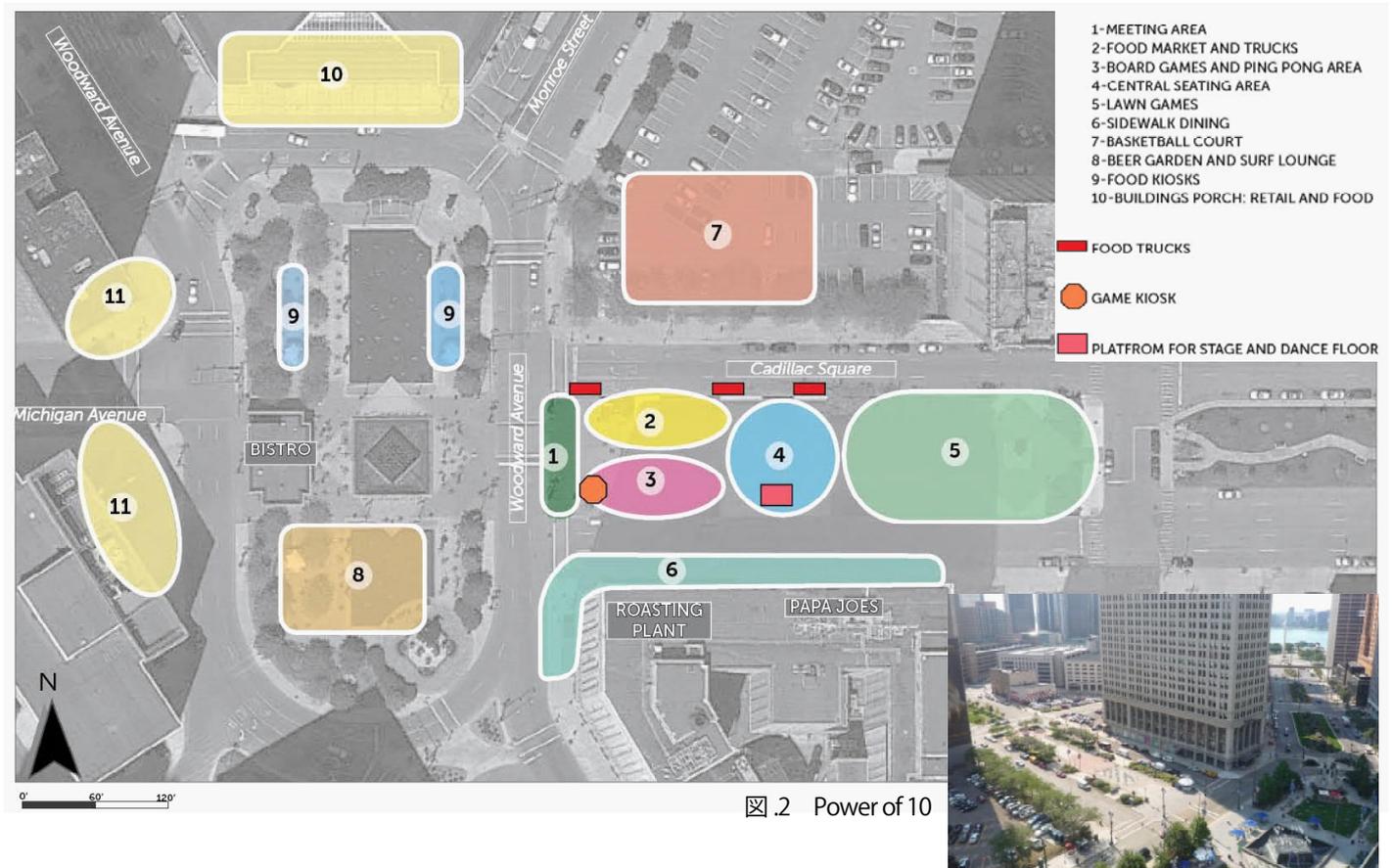


図.2 Power of 10

これはただのイメージーションではありません。もうすでに、部分的に始まっています。図.5は今年の夏に撮られた写真ですが、すでにダウンタウンの中には、砂場があったりとか、人が集まってくるテーブルや椅子があったりとか、そういう様々なアクティビティがすでに始まっています。デトロイトの人たちは、こうしたことに対して最初否定的だったが、今、こうして変化していることに非常に驚きを持っています。



図.3 デトロイトの Before

図.4 パワーオープンという手法を適用した後にこの都市の中心部の空間がどのように再成されるか、ということシュミレーションしたイメージ





■ボストンでの取り組み

これは、PPSが現在取り組んでいるもう一つのプロジェクトです。これはボストンのハーバード大学のキャンパスの中にある、ハーバードスクエア広場です。ここでも、デトロイトと同じですが、パワーオープンの10の手法が適用されまして、このハーバードスクエア広場の中でどのようなことができるか、住民や大学教員、それから学生もいれて、ワークショップをしました。大学が、サッカーコートぐらいのスペースを使用して、周辺住民も含めたアクティビティを行うための場所を提供することを決めました。進め方としては、大学の教員、それから大学の学生、それから、周辺の地域住民の力を借りて、パワーオープンという手法を使って、ここでどういう空間にしたいか、どういう場所を作りたいか話を合っていました。



学生や教員、それから周辺に住む地域住民やその家族も、みんな一緒になってこの場所を使うという素晴らしい空間となっています。



■ Bryant Parkでの取り組み

まず最初に伝えたいのは、マネジメント・管理という言葉は、パブリックスペース・オープンスペースを成功に導くために一番重要なものです。20年前、ブライアントパークをこれからどういう風に変えていくかという一番最初の時にPPSは非常に力を発揮しました。今はどちらかというとその傍観しているような立場に変わってきています。

ニューヨークの中心のマンハッタンの真ん中にあるブライアントパークは、面積は約2.4ヘクタールになります。これは、ニューヨークの市立図書館に隣接した公園です。今日では、ここが都市の中のオアシスとして機能しています。この場所に来るだけで、たくさんの発見があるような、本当にいろんなアクティビティが起こりうるような場所になっています。アクティビティを行うだけの場所ではなく、ただ静かに本を読む、リラックスできる、そういう場所にもなっています。この公園は、夜にはまた違う表情を見せますが、夜の表情というものが、公園にとって非常に重要な位置づけになります。そして冬にはスケートリンクが設置され、たくさんの人を呼び寄せる魅力的な場所です。

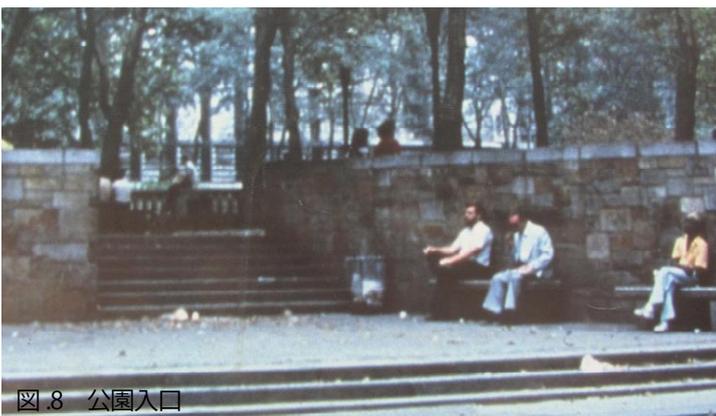


図.8 公園入口



図.6 1980年代のブライアントパーク

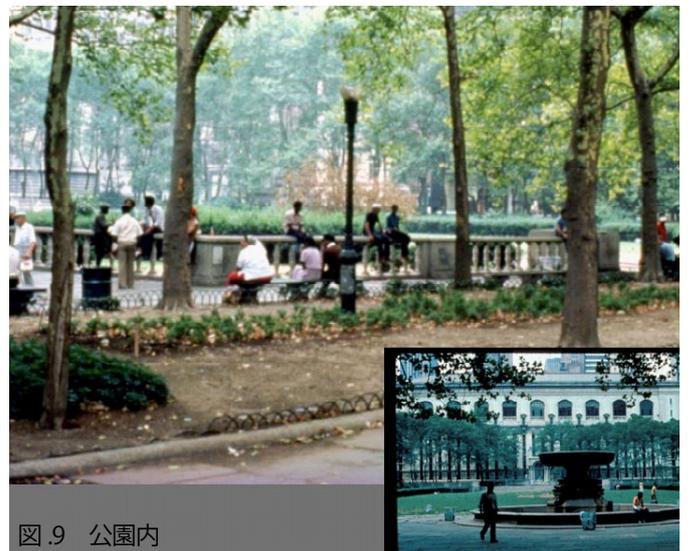


図.9 公園内

ブライアントパークは、昔からそのような状況ではありませんでした。図.6は、1980年後半の写真です。この時は、公園自体が危険な場所で、だれも立ち寄りたくなかった、そういう危険な場所でした。本当に誰も気にも留めない、近づかないようなそういう場所でした。ドラッグを買いたい時はこの公園に行くという、そういう有名な場所でした。図.8は公園へのメインの入口です。人々を招き入れるような形にはなっていません。図.9が、その当時の写真です。1980年台の後半に、PPSはこの計画段階に招聘され、ハリー・ホワイトの指導の下、このブライアントパークの再生計画に取り組みました。

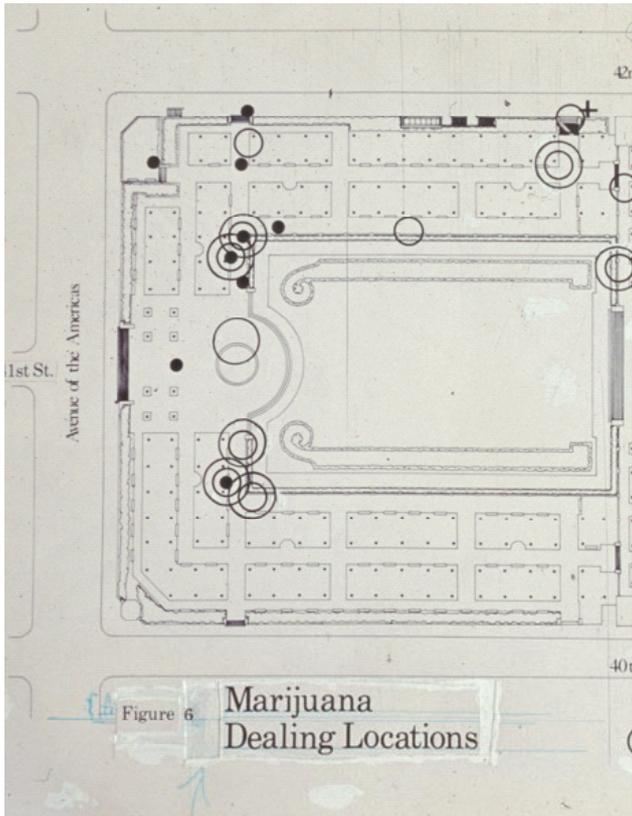


図.10

図.10の丸が描いてあるところがブライアントパークの当時の現況の分析ですが、ここは、ドラッグディーラーが集まるところでした。図.10の右側の図面で黒く太い点線で書いてあるところが、公園へのアクセス、それから動線です。

まず、一番初めのプレイスメイキングの鉄則ですが、一番大事なものは、その場所を人々が進んで行って行きたくなるような、そういう素晴らしい場所・空間を創ることです。そうしたビジョンが、一番最初にあります。初めにもお話ししましたが、一番大事なこと、アイデアを膨らますことはできますが、それを実際に実践して、このプロジェクトを終わらせるのはすごく困難なことでした。1980年代の後半ですが、ニューヨークの市内は、BID・ビジネス改善地区を新しくつくるとい動きが起こってきました。このBIDというのは、簡単に説明すると、公園の周辺の街区、公園の眺望がある建物やオフィスのオーナーの方たちの、その街区の枠（枠というのは場所によっては指定の枠って広かったり狭かったりする）を指す意味です。それぞれの建物から、一番真ん中に見えるのがブライアントパークと図書館です。ここでお伝えしたかったのは、だいたい80万㎡がこの公園を取り囲んでいます、この建物のオーナーから、ある程度のお金を集めて、それがブライアントパークの管理の費用に充てる、そういうシステムをつくりました。このビジネス改善地区の委員会をつくる時に、それぞれのビルの所有者や土地の地権者約25名を集めた、BIDというものを発足しました。地権者や土地所有者から集められたお金（11億円）は一旦ニューヨークに徴収され、再びブライアントパークの管理費として戻ってくる仕組みです。

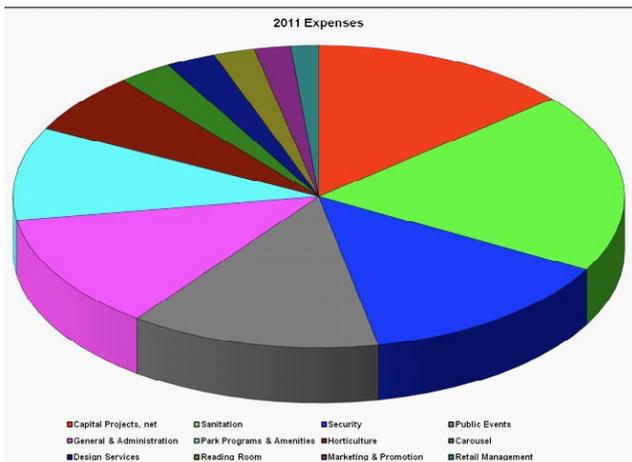
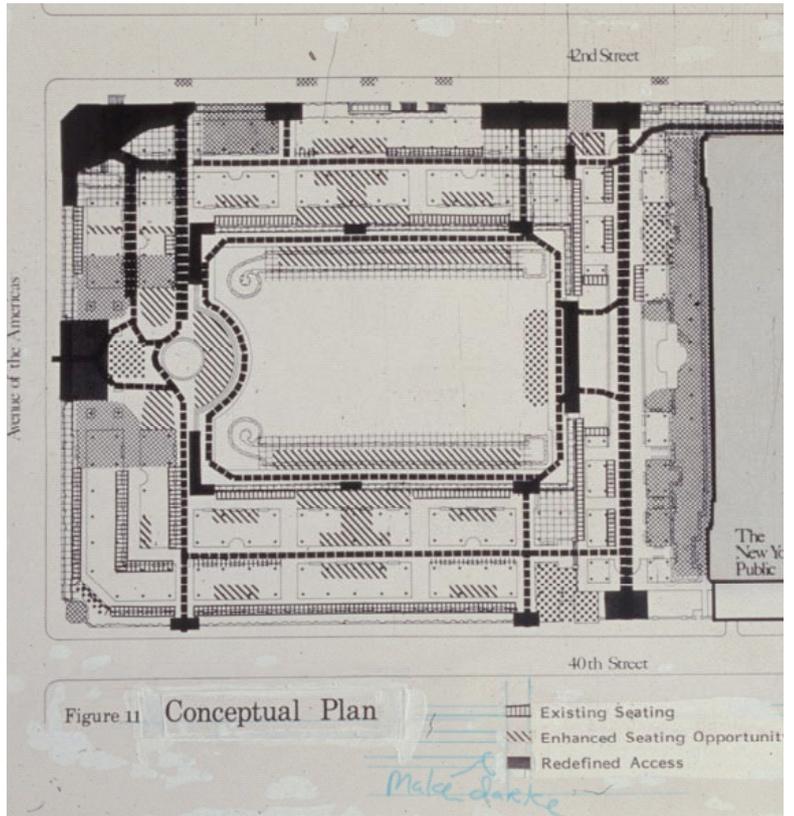


図.11

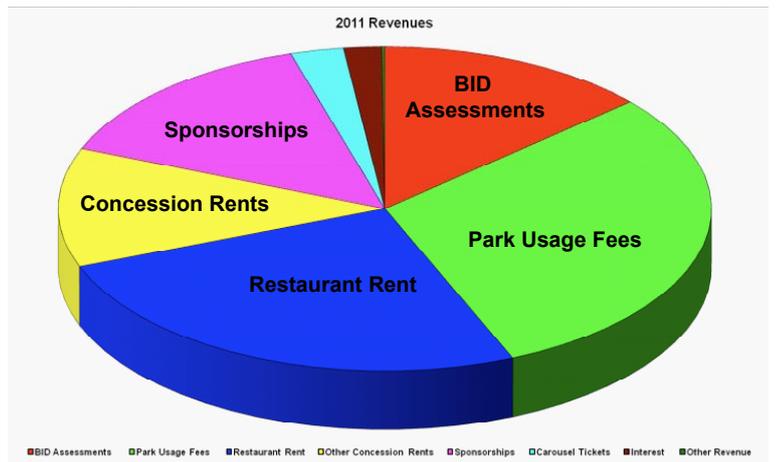


図.12

これは、ビジネス改善地区の中で収入源がどのような割合になっているかのグラフです。このオレンジでみるところの、20%が、ビジネス改善地区から集めたお金です。そのほかのお金は、例えば、この右側の、公園利用料、これは、コンサートなどのイベントを行った際の入場料からとったものです。それから、レストランへ土地を貸している賃料からとったもの、そして、スポンスシップとありますが、これは公園の中に、企業の名前が入ったベンチを置くなどしながら集めたお金です。そういったものをすべて集めて、収入源となっております。公園は、市が所有していますが、管理はブライアントパークコーポレーションがしています。公共の団体だけがやっているのではなく、公共と民間が一体となって、このブライアントパークのプロジェクトに取り組んでいた。ということが非常に重要な事実です。

この公園を管理する契約は5年契約で、5年ごとにこの契約が更新できるかできないかということが、評価によって決まります。図.12は、そうしたお金がどのように使われたかを示すチャートです。図.12のオレンジの一番多く使われているキャピタルプロジェクトは、公園の修繕や、新しい歩石を入れ替えたりとか、新しい排水溝を取り替えたりとか、そういうものに使われるお金です。

ブライアントパークのビジネス改善地区の成功があって、現在ではニューヨーク市内に68のビジネス改善地区があります。この新しい開発や再開発が起こる度に、この開発の主体は、BIDを新しくつくりたいという動きが非常に活発になってきています。これは、BID・ビジネス改善地区というのが、ビルのオーナーと公園の両方にとっていいことがあるということを見なさん認識しており、こうしたものが、毎年毎年、非常に活発に促進されています。

これは、アメリカでの大きい問題ですが、ビジネス改善地区の中で15%ぐらい使っているセキュリティは公園の安全性を保つための人の確保であり、サニーテーションはゴミを片づけたりするお金になります。そういったところにすごくお金を使っています。どこのビジネス改善地区でもこの取り組みをしています。

このビジネス改善地区の年間の予算ですが、68あるビジネス改善地区の予算は非常に少ない2000万円規模から11億円までと予算規模にも非常に幅があります。これは非常に長く時間がかかるし、忍耐が必要なプロジェクトですが、これをやるだけの価値は非常にあります。

ブライアントパークの清掃のグループの人たちがすることは、ただゴミを片づけたり、言われたことをただやるだけではなく、“公園全体の質を管理する”ということを目標に毎日仕事を行っています。

ブライアントパークの中には、約3,000個の動かせるテーブルと椅子があります。PPSのハリー・ホワイトが最初に言っていたのは、“もしかしたら人々はこの公園の中で、自分だけのテーブル・椅子が欲しいんじゃないか”ということを直感的に言っていました。彼は、どうやって人が椅子に座るか、どこの椅子を使うかということビデオで記録しながら研究していましたが、“必ず人は座るときに大体3センチくらい動かして座る”“自分のポジションに戻して座る”などを発見しました。これは人間の本質と言うのか、そのまま座らないで、必ず椅子を自分の快適な位置にずらして座ると言うのが人間の本質なんじゃないか、と思いました。ですので、椅子をまっすぐに並べないで、非常にランダムに分散・配置されるようにいつも気を付けています。



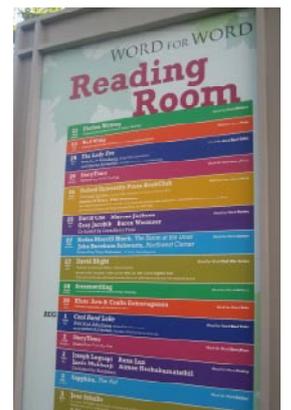
他には、スナックや気軽に軽食が取れるレストランやキオスクがたくさんあります。どんな人でも楽しく食事ができるような場所が用意されています。それと、園芸部門ですけれども、花とか園芸というものも、公園の中で非常に重要な要素のひとつです。こうした花、季節ごとの花というものを、公園の一番端っこに持ってくるということが非常に重要です。これで人を招き入れるということです。それから、デザインとブランディング、このサインのデザインとかいろんなグラフィックのデザイン、そうしたのも非常に重要です。パラソルとか椅子とか全てのいろんなスキームから、もう全てですね。それぞれのアクティビティに、アイデンティティを与えるということも大事です。ブライアントパークの周りにも、ブライアントパークのロゴが入ったものを周りに配置しています。



春と夏と一冊づつ、アクティビティをに関する本が出ています。その中に、パワーオブテンの手法も載っています。一番簡単に、早く、安くできることによる、そういったことの本質が書いてあります。一番簡単に出来そうで、お金がかからずに出来ることをまずやろう、ということです。例えば、チェスボードを置く場所が、そこでもし駄目だったら、他の場所に移して調整します。これは、place makingの非常に重要なステップのひとつです。ブライアントパークでは、チェスとか卓球とかミニゴルフというものをアクティビティでやっています。また、自由にお金を払わずに外で本を読める移動図書館もあります。子どもたちが大好きなメリーゴーランドもあります。場所の中に色々なアクティビティをミックスしながら繋ぎ合わせるような作業になります。バードウォッチングや太極拳など、30以上のアクティビティがこの公園から生まれています。色々な形の音楽やヨガ、夏の月曜日の夜には4~5,000人が映画を観にくるなど。芝生は、冬にはアイススケートリンクに変わります。

これは、ただ良い場所をつくっているのではなく、この周りの土地所有者にとっても、価値・メリットがあります。ブライアントパークは、ニューヨークの市の中で最も成功していて、不動産業者も、このブライアントパークの前に集まっています。このブライアントパークの周りのオフィス貸し出している率が高く、空き室は全然ありません。それぞれのすべての建物の名前に、ブライアントパークというのが必ず記載されています。ニュー Yorkerにとって、ブライアントパークは非常に重要な目的地のひとつとなっています。オフィスで働いている人や、家族や、いろんな年代の人たちが集まる場所になっていて、みんなにとって宝石のような公園となっています。





都市・地域 再生の先進 事例紹介

忽那裕樹

(くつな ひろき)

ランドスケープ・デザイナー
E-DESIGN 代表



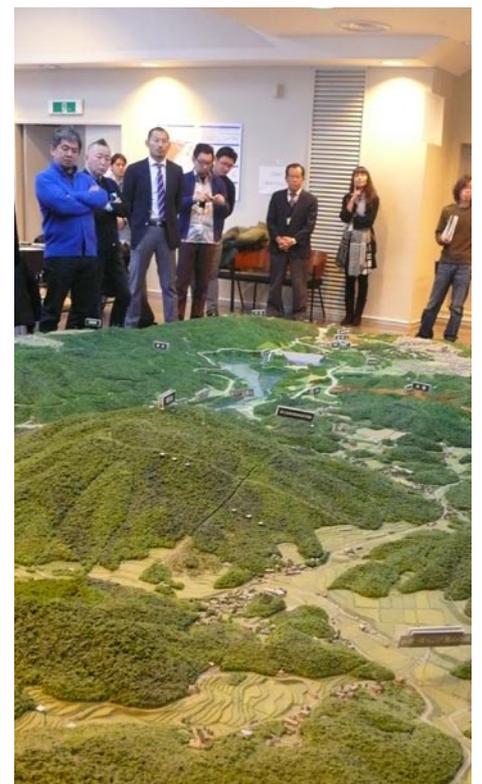
Hiroki Kutsuna

Landscape architect, principal of E-DESIGN

Mr. Kutsuna was born in 1966 in Osaka, Japan. He graduated from the Department of Environmental Sciences and Technology at Osaka Prefecture University. He has designed a number of exterior spaces including gardens, parks, plazas, college campuses, commercial complexes, multi-family housings, and hospitals. His design concept is the place that appears beautiful and complete when people use it. His design work is not only limited to physical design, but also extends into various activities related to improvement of outdoor spaces such as creation of outdoor events, park management, and modifications to the legal systems. He is also a chief producer of "the Aqua Metropolis Osaka Festival," the event which promotes the branding of Osaka, and founded an organization, "the Aqua Metropolis Osaka Partners" which aimed to make Osaka into the best aqua metropolis in the world through social experiments and development of legal system with government agencies and businesses. He has received Good Design Award (Senri Rehabilitation Hospital, Nouvelle Akabanedai Apartments, Brillia Residence Rokko Island) and Japanese Institute of Landscape Architecture Encouragement Award (Kinki University Main Campus Senshin Garden).

1966年大阪府生まれ。大阪府立大学農学部緑地環境工学科卒業。景観・環境デザインをはじめ、まちづくりの活動や仕組みづくりまで、幅広いプロジェクトに携わる。庭園をはじめ公園や広場、大学キャンパス、商業・集合住宅・病院などのランドスケープのデザインとプログラムを国内外で展開。また、パークマネジメント、タウンマネジメントを通して、地域の改善や魅力向上に様々な立場に関わり、現在、官民協働の場として設立した水都大阪パートナーズ及び江之子島文化芸術創造センターのプロデューサーを務めている。

GOODDESIGN 賞（千里リハビリテーション病院、ヌーヴェル赤羽台、ブリリア六甲レジデンス）、造園学会奨励賞（近畿大学本部キャンパス「洗心の庭」）、他多数。NPOパブリックスタイル研究所理事長。



ー行政課題を解決するイノベーションー プラットフォーム形成支援事業

河川室と文化課が連携し、新しい公共事業の実施体制を作り出そうとする本事業は、文化課が大阪府立江之子島文化芸術創造センター（enoco）の指定管理者“長谷工コミュニティ・E-DESIGN プラットフォームグループ”とともに実施する「プラットフォーム形成支援事業」の一環として取り組むものです。「プラットフォーム形成支援事業」は行政課題が複雑化、多様化する中、単独の部局だけでは対応が難しい複合的な行政課題に対し、住民、専門家、企業、大学、行政など多様な立場の組織や人が集まり、プラットフォームを形成し、アートやデザインを手法として対等な立場で課題を検討、事業を推進することで、複合的な課題を同時に解決しようとするものです。

Innovation to solve governmental problems

Project to support the platform

This project is intended to create a new public project system, and it is run by Osaka Prefecture waterway department, cultural department, and designated administrator of the building “enoco”, “Haseko Community and E-DESIGN platform group”. Today’s governmental problems have become so complex and diverse that they are getting more and more challenging to be solved within one department. In order to solve those problems in more efficient and effective manner, a multi-disciplinary group called “platform” that consists of residents, professionals, businesses, universities, and government agencies is formed and approaches problems interactively and simultaneously using art and design as tools.



ー都市の水辺の魅力づくりー 水都大阪における試み

大阪府市の共通戦略である「大阪都市魅力創造戦略」における重点取り組みの一つとして、水と光の魅力で世界の都市間競争に打ち勝つ「水と光の首都大阪」の実現に向け、平成25年度から、新たな推進体制を構築しています。

水と光の取り組みの基本方針を一体的に審議する「水と光のまちづくり推進会議」のもと、民主導の事業推進組織「水都大阪パートナーズ」と、その活動を支える府市の合同組織「水と光のまちづくり支援本部」を設置し、世界に発信する「水辺都市大阪」の都市魅力創出に取り組んでいます。

一般社団法人水都大阪パートナーズ

設立：平成25年4月26日

役員：代表理事 高梨日出夫氏（株式会社アークポイント取締役）

理事 泉 英明氏（有限会社ハートビートプラン代表取締役）

忽那 裕樹氏（株式会社株式会社 E-DESIGN 代表取締役）

Creating attractive urban waterfront

Aqua Metropolis Osaka

Osaka Prefecture and city share the initiative to enhance Osaka as an attractive city with water and light as its theme. The new system was established in 2013 to execute this initiative.

Private organization “the Aqua Metropolis Osaka Partners” and its supporting government organization, “the Aqua Metropolis Osaka Authority” were founded under “the City of Water and Light Implementation Council” which deliberated the approach to enhance the city. The new organizations have been striving to create an attractive city, the Aqua Metropolis Osaka that appeals to the world.

The Aqua Metropolis Osaka Partners

Date of foundation: April 26, 2013

Board members: Representative Director, Hideo Takanashi (Director of Ark Point)

Director, Hideaki Izumi (Principal of Heart Beat Plan)

Hiroki Kutsuna (Principal of E-DESIGN)

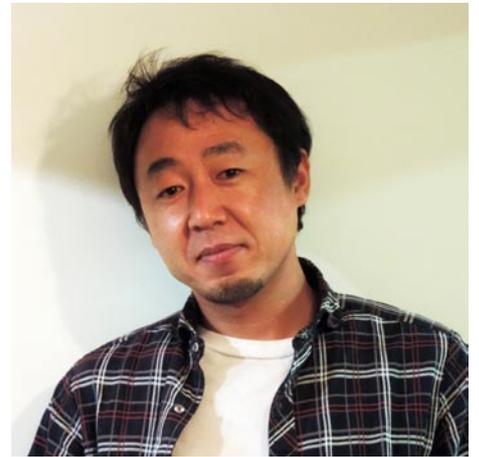


都市・地域 再生の先進 事例紹介

西村 浩

(にしむら ひろし)

建築家
ワークヴィジョンズ 代表



Hiroshi Nishimura

Architect, principal of Work Visions Inc.

Mr. Nishimura was born in 1967 in Saga, Japan. He graduated from the University of Tokyo with undergraduate and graduate degrees in engineering. After working for a design firm for a while he founded Work Visions Inc. in 1999 and has been working on interdisciplinary projects encompassing architecture, civil engineering, and planning with the focus on "community." His representative projects include Oita City North-South Axis Concept, Saga City Revitalization Plan, Hakodate City Total Design, Iwamizawa Compound Station Building, Toba Seaside Promenade, and Bridges in Nagasaki Seaside Park. He has received Architectural Institute of Japan Award, Japan Society of Civil Engineers Design Award, Good Design Award, Building Contractors Society Award, Brunel Award, and ARCASIA Award for Architecture.

1967年佐賀県生まれ / 東京大学工学部土木工学科卒業、東京大学大学院工学系研究科修士課程修了後、設計事務所勤務を経て1999年ワークヴィジョンズ設立。建築・土木・まちづくり等、常に「まち」を視野にいれ、分野を超えてモノづくりに取り組む。

主な計画・作品に、大分都心南北軸構想、佐賀市街なか再生計画、函館市中心市街地トータルデザイン、岩見沢複合駅舎、鳥羽海辺のプロムナード、長崎水辺の森公園橋梁群など。主な受賞歴に、日本建築学会賞、土木学会デザイン賞、グッドデザイン賞大賞、BCS賞、ブルネル賞、アルカシア建築賞 他多数。



-ひとつのレンガがまちをつくる-

岩見沢複合駅舎

岩見沢は、かつて石炭産業を背景に物資輸送の要衝として繁栄を極めた“鉄道の街”である。しかし、現在の中心市街地には人々の賑わいのない凋落の風景が広がっている。この岩見沢複合駅舎には、単なる駅としての機能を越えて「まちの顔となり、変わらない価値を持つ駅舎」、「地域文化を担い、地域の交流拠点となる駅舎」、「中心市街地との積極的な関係を持つ駅舎」として、未来に向かってまち再生へ向かう強い意志を込めた。

駅からまちづくりへ。この施設の本当の価値は、地域のよさを掘り起こし、人と人との繋がりを再生しながら、これからのまちづくりに繋げていくことにある。

Bricks making community

Iwamizawa Compound Station Building

Iwamizawa, with its background in coal industries, used to prosper as a key junction of cargo shipment and also as a railroad town. However, the downtown has become deserted over time. In addition to serving functions as a station, Iwamizawa Compound Station Building was designed with an intention to be the face of the community with everlasting values, the center of community interaction, and the building that has an active relationship with the downtown. In other words, it is expected to trigger revitalization of the community.

The real value of this station building is that it reveals the uniqueness of the community, promotes interaction among people, and provides opportunities to build a strong community.



- 空き地が増えるとまちが賑わう！？ -

佐賀「わいわい！！コンテナ」プロジェクト

借地した遊休地を芝生の原っぱに置き換え、中古コンテナを使った雑誌図書館を設置し、約8カ月間、街なかの回遊性を促すプログラムや持続可能な維持管理、運営の仕組みの検証を行った。雑誌図書館には、子どもたちからお年寄りまで幅広い世代に楽しんでいただけるよう、購入や寄付により約300種類の雑誌とマンガや絵本を用意した。松原川沿いの心地よいテラスと原っぱは、子どもたちや市民が自らの手で整備し、街をシェアし大切に使う気持ちで熟成していくことを考えた。

Idle land as an opportunity for community revitalization

Container project in Saga

The leased idle land was turned into an open grass area, and a magazine library made of used containers was placed there for eight months. In this project, sustainable maintenance and operation as well as programs to enhance the community were tested. 300 magazines and books were purchased or donated, and they were selected to appeal to different generations. The comfortable terrace along Matsubara River and the open grass area were maintained by local residents with the intention that it would bring the sense of community to them.



都市・地域 再生の先進 事例紹介

山崎 亮

(やまざき りょう)

コミュニティデザイナー
studio-L 代表



Ryo Yamazaki

Born in 1973. The founder and director of studio-L. A professor at Kyoto University of Art and Design, where he heads the Department of Spatial Design within the Faculty of Art and Design. As a community designer has been involved in a wide range of projects, including workshops for community residents interested in solving local problems, the drafting of comprehensive plans through consultation with residents, designing architecture and landscaping, and resident-centered park management. Published works include Komyuniti dezain (Community Design) and Machi no kofuku ron (Contented Communities).

京都造形芸術大学教授。慶応義塾大学特別招聘教授。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。まちづくりのワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、建築やランドスケープのデザイン、市民参加型のパークマネジメントなどに関するプロジェクトが多い。「海士町総合振興計画」「マルヤガーデンズ」「studio-L 伊賀事務所」でグッドデザイン賞、「親子健康手帳」でキッズデザイン賞、『コミュニティデザイン（学芸出版社）』にて不動産協会賞などを受賞。



—多様な主体がつながる計画づくりと実践— 墨田区食育推進計画策定

地域で考える食育計画

墨田区は、先進的な食育の取り組みを展開し、NPO 法人や市民活動団体などのテーマ型コミュニティも活発に活動しているのが特徴的な地域です。区内に農地が無いことから、区外の生産者とのつながりを生み出し、連携を促進するためのイベントを地域の若者たちが実施しています。また、地域の女性を中心に結成された団体も、食育活動や人材育成などの取組みを積極的に進めてきました。

今回の計画では、こうしたテーマ型コミュニティの活動をさらに次のステップへとつなげ、それぞれの取組みの連携等を生み出すことを目標にしています。

Connecting diverse initiatives Implementation plan of dietary education in Sumida District

Sumida District in Tokyo is known for its progressive dietary education as well as the active NPO's and volunteer organizations. Since there is no farm land within the district, young members of the community have been reaching out to the producers outside of the district and held event to promote the relationships. Also, the group consisting of local women has been working on dietary education and human resource development.

This implementation plan is aimed to bring those activities by local NPO's and volunteer organizations to the next level, and connect their activities to work together.



—マンガを活用した公共施設のマネジメント— 立川市子ども未来センター指定管理業務

マンガを切り口とした新しいコミュニティづくり

立川はいくつかの有名なマンガのストーリーの舞台となっており、その世界では一つの「聖地」と呼ばれています。子ども未来センターでは、市民活動団体がまんがぱくを利用してマンガをテーマとしたプログラムを実施することにより、一般の市民活動団体や子ども、子育て世代、高齢者などがマンガをひとつの切り口として施設に積極的に関わる「開かれたコミュニティ」づくりを進めています。

Management of public facility with cartoons as a theme Designated administrator service for the Center of Children's Future in Tachikawa

Several well-known cartoon stories take place in the City of Tachikawa, and it is treated as a sacred land by their fans. Center of Children's Future offers programs involving cartoons organized by a volunteer organization. Those programs are intended to create interaction between different generations from children to elderlies, and the facility serves to promote the open community.



パネル ディスカッション

パネリスト

ノーマン・ミンツ
忽那裕樹
西村 浩
山崎 亮



■パワーオブテンのディティール

>山崎氏

パワーオブテンのディティールが知りたいですね。中身、どんなのがパワーオブテンなのか、それを教えて下さい。

>ミンツ氏

パワーオブテンというのは、10の手法があるわけではなく、パワーオブテンの10の数字は特に意味がなく、6個でも12個でも、8個でもいいんです。住民の中で一番その地区を知っている人たちをまず集めて、その人たちからどういうことがあって、そこでどういう価値があって、どういうものをコミュニティの中に持ってくるかということを見出す。その中に場所を見つけていきます。その場所の見つけ方で、その場所が6個あるとか8個あるとか。そういうことでパワーオブテンをそのアイコンとして使っています。

そこに住んでいる方が一番その場所のことをよく知っていますから、専門家というよりはその場所に対する知識が非常に深い人たちのことを差しています。そういう人たちから、その一番キーになる場所というのを聞き出していきます。



■受益者負担

>山西村氏

すごく大事なことは、常に変化を感じる場所、要は、いつも環境が固着しないで、何か行くたびに変わっている状況をどう作るかということにすごく力を尽くされているということを感じました。

結局はBIDというのは公園の周囲の建物のオーナーからお金・資金を集めて受益者負担という形になっているんじゃないかと思います。公園に面した人たちに利益があるから、その人たちから資金を集めるという形になっていると思います。まさにそういうことができればいいですが、実際、合意形成が本当にそんなにとれるのか、“面しているからお金を払え”ということが成立するのか、ということが一番日本では難しい状況じゃないかと思うので、その辺を聞きたいなと思います。

>ミンツ氏

ニューヨークの州法で決まっております、この周辺の51%の地権者がこれを同意した場合、全員がお金を払わないといけないという仕組みになっています。

この課金のシステムですが、これは、日本と同じだが、アメリカでは、その建物の地権者が払う土地の税金と同じようなかたちで、州から課金されると、それに対して必ず支払わなければいけない。そういうシステムになっています。それはプライベートな合意のもとにその中で支払うのではなくて、行政に対してちゃんと課金されてそれを支払うというそういう仕組みになっています。

>西村氏

私は、土地利用に対して税金、利用形態に対して税金をかけるべきだと思っていて、これから都市をつくっていく中で、土地利用をマネジメントしていかないといけないと思っています。それに対して、マネジメントするには、正しい土地利用には税金を安くして、“これやっちゃいけないよ”という土地利用には税金を高くするぐらいのことをやっていかないと、やっぱり都市ってよくなっていかないとと思っています。そこが、実際に法で実践されている社会が、素晴らしい社会だと思います。

>ミンツ氏

このお金の使われ方が、彼らにとって非常に社会的な価値があるお金の使われ方をしている、ということに満足感がでている、と。それに対して、通常の税金の課金は非常に少ないものです。

>山崎氏

たぶん、所得税の10%とか1%とかになっているんですね。

>ミンツ氏

特にこの素晴らしい点は、彼らが自分たちで払ったお金がどうやって目に見える形で使われているのか、見えるのか、と、そこに非常に満足感を得るところがポイント。

>忽那

ビジュアライズされていくということですね。

>山崎氏

51%賛同させるのにも結構苦労がある気がするんですが、そこは誰がサポートしてるのか、それをすごく知りたいですね。

■いつから？

>山崎氏

この法はいつからできているの？

>忽那

1989年に法律ができて、施工が1991年。そこでBIDの法律が始まって、51%のさっきの話が出てきたと。その前に、パイロットプロジェクトと言う言い方をしていたけれども、社会問題解決としての公園、ということで、活動を始めるという時があった。その活動期間が、7.8年続いているというカタチで、州法としてまとまっていく、ということでもスタートしていくと。

■初動期

>忽那

初動期、一番最初に、どういう人たちを巻き込みながら、社会の問題を共有し、問題解決についてどのように人や組織をまとめていったのか。人選の方法や25人のコミッティーの話も含めて、どういう形で選考していたりするのかを教えてくださいと思います。

>ミンツ氏

まず最初に、ビジネスセンス・不動産とか、不動産の価値がわかる人、それをどうやって運用していくか、がわかる人を見つけることです。その中でビジネスセンスがあることは非常に重要で、そこに新しいビジネスが生まれてくる、そういう場所をつくっていくというセンス、それから、そういうものに向かっていくということがまず最初に非常に重要です。

一番最初にやらなければいけないことは、こうしたものに対して一番、明快に賛同してくれそうな人にまず行って、そこで、賛同者・支持するグループを作るということですね。彼らと、まず一番最初にプロジェクトを始める。

■巻き込み方

>忽那

西村さんにお伺いしたいのですが、巻き込み方というか、おもしろいと思う人たちをどんどん巻きつけて、巻き連けたら“金になるやんか”というビジネスセンスというか、その辺の話はすごく共感するものがあります。その辺のコツというのはどんな感じですか？

>西村氏

色々なまちに行きますが、必ずまちづくりが好きな人がいて、やりたい、という人は絶対にいるんです。まず最初に、その人たちと議論をして、やれることをやる。さっきもありましたよね。blighter、quicker、Cheaper、3つあったんですけれども、まさにその通りで、そこから始めて、少しずつその続きが変化をし続けるという、常にこう、チェンジするというのを、少しづつ見せるということをやっているだけです。

■感覚

>忽那

機運と次にその話が広がると、お金も回ってくれるという感覚が出るのは、どの辺なんですか？

>西村氏

芝生を張るっていうのは実に簡単で、実は芝生もレンガも、共通点があって、たくさん数があるということ。たくさん数があると、たくさんの人が参加できて、小っちゃい負担や小っちゃいお金で集まると、ものすごいエネルギーになる。ですから、プロジェクトの中に、“たくさんあるもの”っていうのを見つけて、それに市民が一人一人参加するってことをやっていると、ものすごいエネルギーになるってことが最近あるな、と。

■仕組み

>忽那氏

最初の初動期って、かなり仕組みを考えられてると思います。その辺はいかがでしょうか。

>山崎氏

パワーオブテンてなんか近い気がしました。僕らのパワーオブテンはひょっとしたら、人である場合もあって、このまちのキーマン10人みたくのをまず見つけて、でその人たちと一緒にプロジェクトを進めていく、というスタートもありますし、それから、地域の資源ですかね、リソースみたいなもの。広い意味で。こういう特産品があるとか、観光資源があるとか、いうようなパワーオブテンを見つけて、そこから、市民と一緒にディスカッションしていくというようなスタートになる場合もありますね。だから、都市の中でここが可能性があるということを見つけてスタートする場合もあるし、人を見つけてスタートする場合もあるし、地域資源、広い意味での資源を6個か7個を見つけて組み合わせながらまずは小さく生み出していこうという場合もありますし、あるいはそれを全部ミックスして人3人と場所5つとお土産2つでミックスして始めるとか。なんか、そういう、リソースを見つけて組み合わせるスタートが多い気がします。



■キーパーソン

> 忽那

人はどうやって見つけるんですか？

> ミンツ氏

向こうがあなたを見つかるから、キーパーソンは見つける必要はない。

> 山崎氏

そういう感覚です。

両方パワーオブテンだと思ってる。ビジネスセンスある、10人のキーパーソンを見つかることと、10個の場所を見つかることって、スタートアップの時は、両方必要だと思っていています。見つけてもらえないことが多いです。で、その場合は、人にやっぱり聞きに行きます。依頼してくれた、例えばニューヨーク市なら市役所の人でもいいし、誰か僕に依頼してくれた人に、「このまちで面白い人3人くらいいるでしょ」と。「なんか、面白いセンスのいい人3人紹介して下さい」って言って、3人に会いに行きます。で、その人から3人紹介してもらって、9人になって、27人になって、というふうに、地域の人100人くらいと会ったら、コンステーション、ヒューマンコンステーションていうのかな、人脈が分かるっていう。

> 忽那

どういう関係あるいはどういう支援があれば助かるな、いいなと思うかっていうのを、一人ずつちょっとコメントを頂ければと思います。



■スタート

> 山崎氏

BIDが誕生して、51%以上、よっしゃやろうやないかということで、BIDが誕生してからの11億円とか2,000万円とかお金が出てくるのはよくわかりました。そこからPPSの人たちは給料もらいながらガンガンできるけれど、この、最初まだBIDも設定されていないとき、キーマン集めて作ろうぜっていうことを言い始める時のコンサルティングみたいなことは、誰がやっとなねん、と。それは誰かがお金を払って、そういう調整をしてくれているのかどうか。もし払っているとしたら、それは、だれがはらってくれているのかなあというのが知りたいんですよ。市役所が払っているのか・・・

> 忽那

それはパブリックセクターと、プライベートセクターの役割というような形で説明して頂けると非常にやりやすいと思います。

> ミンツ氏

10人もしビジネスマンが集まったら、彼らとそのプライベートな自分たちのお金を出し合っ、まず最初にコンサルタントを雇って、プロジェクトをスタートさせることです。パブリックな人たちは何が出来るか、彼らはもちろん、少しお金を出すことはもちろんできるだろう。だからそれはお金だけではなくて、公共もプライベートも、違う形で貢献ができる。

> 西村氏

単純に、事業を起こしているっていうだけの話で、それを社会・都市の再生とか、まちづくりを事業にする人がいるということが、明快な答えですよ。今までの行政っていうのは、やれるところでやってたんですよ。やりやすいところでやってた。でも今は、やりやすいところでやっちゃダメなんですよ。やらなきゃいけないところを見つけて、やらなきゃいけないんですよ。

> 忽那

ブライアントパークも最初、図書館の改修って話の、行政の課題があったんですね。それに、図書館の改修だけで終わるという建築行為をして終わるのだけではなかった。頑張る人・アイデアのある人に、特権を与える。それは、平等にやっていく、機会が平等、今まで結果で平等でやってきた話を、機会の平等で、頑張る人をお願いして、権限を与えて、思う存分やってもらえる仕組みで、横に繋げるという話のセンスのある人に、コーディネーターを何年か務めて、BIDでやっているようなかたちで5年間やってあかんかったらクビや、ゆう評価の仕組みをきっちりつくって、やっていくということが非常に重要なのかな、と。

会場風景



[主催]

大阪府、大阪府立江之子島文化芸術創造センター (enoco)